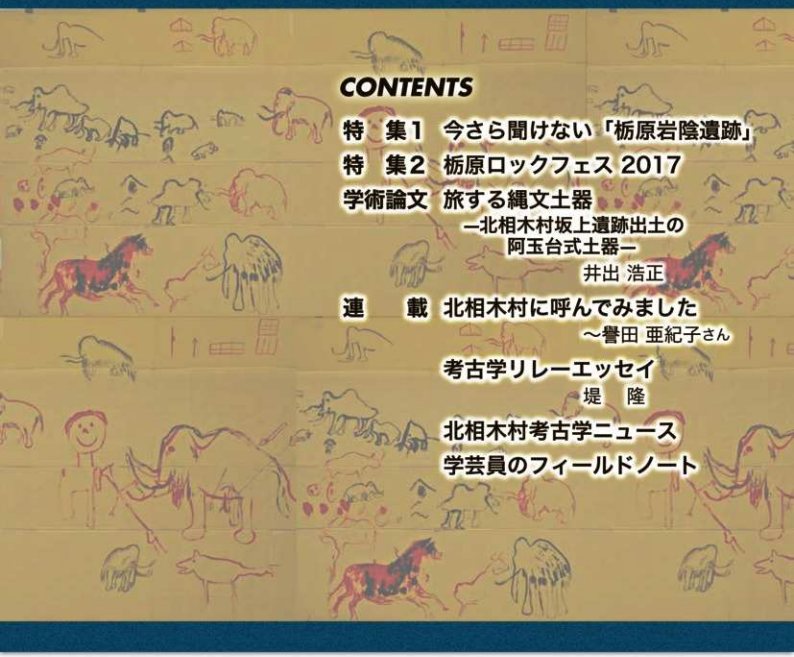
栃原岩陰遺跡マガジン

TOCHIBARA ROCK shelter site MAGAZINE

Vol.01
2018
March

北相木村の考古学最新情報と
考古学界隈のトレンドを紹介するフリーマガジン



CONTENTS

特　集1　今さら聞けない「栃原岩陰遺跡」

特　集2　栃原ロックフェス 2017

学術論文　旅する縄文土器
―北相木村坂上遺跡出土の
阿玉台式土器―
井出 浩正

連　　載　北相木村に呼んでみました
～譽田 亜紀子さん

考古学リレーエッセイ
堤　隆

北相木村考古学ニュース

学芸員のフィールドノート

平成29年度　北相木村考古博物館報

特集1 今さら聞けない

栃原岩陰遺跡

国史跡栃原岩陰遺跡。縄文時代早期と呼ばれる、今から約 11,000 ～ 9,000 年を中心とした遺跡である。

縄文時代の研究者なら誰しも知っている遺跡であるが、現在では 50 年前の発見時にみられたような賑わいはなく、長野県小海町と群馬県上野村を結ぶ県道沿いに、小さく佇んでいるに過ぎない。

しかし、やはりこの遺跡は北相木村の歴史を語る時、また縄文時代早期の文化を語る時、欠かせないのである。ここでは今一度、この遺跡の持つ意味を紐解きながら、その魅力を再確認していこう。

栃原岩陰遺跡の発見 そもそもこの遺跡の発見は、1965 年にさかのぼる。発見したのは佐久地域で考古学の研究を行っていた、奥水利雄氏と新村薫氏である。奥水氏は、佐久の地域の遺跡を中央にあった研究者に紹介するなど、地域の考古学の牽引役だった。また、この頃日本の考古界では、最古の縄文遺跡やそれ以前の旧石器時代の遺跡を求めて、各地で洞窟岩陰が盛んに調査されていた。2 人はここ南佐久地域で、より古い遺跡を探していたのである

余談ではあるが、奥水氏は現岡谷市出身の考古学者戸沢充則氏（元明治大学学長）と親戚関係にあり、話を聞いた戸沢氏は、いつかこの遺跡を調査したいと思っていたという。

さて、2 人は 1965 年の 11 月 23 日、千曲川を遡り、さらにその支流である相木川に分け入った。そして北相木村の栃原という集落で、地元の小学生から「あそこの穴から骨が出るよ」という話を聞く。

2 人は標高 930m、道路脇の小さな岩陰に至る。果たしてそこには、確かに人骨と縄文土器が確認できたのだ。

「これは大発見だ！」二人は直ぐに、信州大学人類学教室に連絡を取る。連絡を受けた研究室では、直ぐさま調査を計画。そして早くも 12 月には、現地での調査を開始している。

これが、この後半世紀に及ぶ、栃原岩陰遺跡の調査に発展していくのである。

Q 栃原岩陰遺跡って、何がすごいの？

A まずは有機質遺物、つまり人骨や動物の骨、骨角器、貝製品などが大量に出土したことでしょう。

さらに栃原岩陰遺跡の場合は、これらの保存状態が極めて良好で、山国のタイムカプセルとも呼ばれるほどです。

また、栃原岩陰部の深さ 5m60cm に及ぶ遺物包含層では、基本的に下に行くほど古い遺物が埋まっており、時期ごとの遺物（道具）の移り変わりが分かることも、大きな特徴の 1 つです。

Q 岩陰って何？

A ここで言う岩陰とは、岩質の崖面に開いた穴のうち、開口部の幅が、奥行きよりも大きいのもを指します。つまり、浅い洞窟状の地形と思って下さい。

八ヶ岳起源の火山堆積物の多い北相木村には、堆積物が川の流れによって削られて岩陰が、大小150以上確認されています。

12 体の縄文人骨のうちでも、1 号と 4 号人骨は保存状態が良く、顔の復元が試みられている。

栃原岩陰遺跡では100点近い骨角器が出土しているが、シカやイノシシの四肢骨を割り先端を尖らせた道具も多い。中でも写真中央のものは、長さ約17cmの見事な逸品である。

様々な形状の骨角器であるが、未だその用途が解明されていないものも多い。写真のものも奇妙な形に削り磨かれているが、用途は分かっていない。

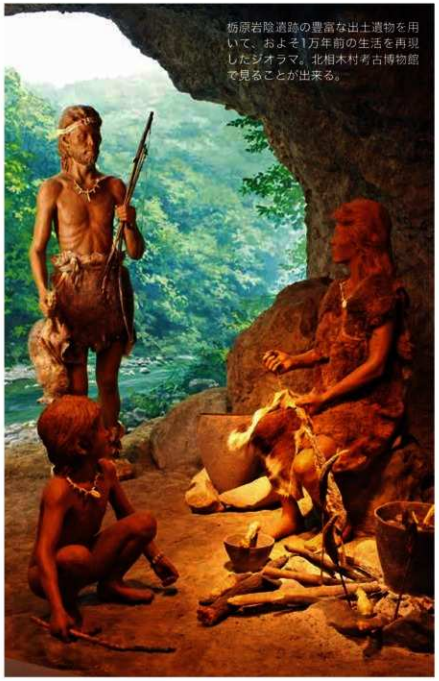
海棲の貝とその加工品が130点以上出土したことも、この遺跡の驚きの一つである。このうちツノガイ、タカラガイ類、ハイガイ、イモガイなどは、加工して装身具として使われたと考えられている。

驚きの連続　これ以降、遺跡では毎年6月から8月にかけて、信州大学を中心とした「栃原岩陰遺跡発掘調査団」による、地道な発掘調査が続けられた。

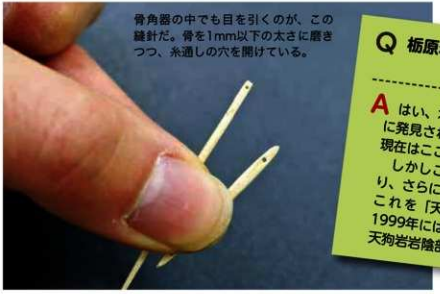
すでに1965年における人骨の発見がそうであったが、この後も、調査は驚きの連続であった。人骨は次々と見つかり（調査終了時には12体を数える）、生活道具である土器や石器はもちろん、食料とされた多量の動物の骨、その骨を材料とした数々の道具、さらには海の貝を使った装身具などが、留まることなく出土したのである。

さらに、当初の予想と異なり、遺物の出土は途切れることがなく続き、1971年の第11調査時には、発見時からの深さ約560cmに及んだ。ここでようやく砂の堆積する旧河床面に至ったと判断し、発掘調査は一つの区切りを迎える。

しかしこの一連の調査で見つかった数々の遺物は、まさに縄文時代早期のタイムカプセルと呼ぶにふさわしいもので、その学問的価値は、今も少しも衰えていない。むしろ研究の進展により、その重要性は益々高まってきているのである。



栃原岩陰遺跡の豊富な出土遺物を用いて、およそ1万年前の生活を再現したジオラマ。北相木村考古博物館で見ることが出来る。



骨角器の中でも目を引くのが、この縫針だ。骨を1mm以下の太さに磨きつつ、糸通しの穴を開けている。

Q 栃原岩陰遺跡って、いくつかの岩陰から出来てるって本当？

A はい、本当です。先ず一番西側が、1965年に発見され多量の遺物の出土のあった岩陰で、現在はここを「栃原岩陰部」と呼んでいます。しかしここから東にはごく小さな岩壁があり、さらに東には、大きな開口部があります。これを「天狗岩岩陰部」と呼んでいます。1999年には、史跡整備事業にともない、この天狗岩岩陰部を部分的に発掘調査しています。

調査は今も続く　実は栃原岩陰遺跡は複数の岩陰からなり、ここに書いた一連の調査の行われてた岩陰部を、現在は「栃原岩陰部」と呼んでいる。この東に小さな岩陰があり、さらに東には、栃原岩陰部よりも規模の大きい岩陰が存在している。これを「天狗岩岩陰部」と呼んでいるが、1999年に行われた試掘調査では、ここからも江戸期から縄文前期の遺物が確認されている。その意味では栃原岩陰遺跡の発掘調査は、未だ終わっていないと言えよう。

さらに発掘の終わった栃原岩陰部でも、出土した遺物の調査研究はまだ続いている。これだけ膨大な量の遺物を把握するには、時間も人材も必要であり、加えて新しい研究方法の登場によって、これまで以上の情報を引き出すことも可能となってきている。例えば近年には、放射性炭素年代測定による土器や人骨の年代測定、骨の科学的分析による食料の推定、蛍光X線による黒曜石の産地推定などが行われている。

北相木村考古博物館では、今もなお作業を継続中であるが、2019年の4月には、正式な発掘調査報告書を刊行の予定である。

北相木の冬は長い。氷点下10度を超える日もあるこの地で、人々はどんな暮らしを営んだのか。

今後も研究は続けられていく。

煮炊きの道具である土器も多量に出土しているが、写真の5点の破片は、放射性炭素年代測定によって、およそ11,000～10,700年のものと推定された。

Q トチバラなの？トチハラなの？

A トチバラです。濁ります。

現在の栃原岩陰遺跡。内部の栃原岩陰は、見学が可能である。県道上野小海線のすぐ傍らにある。

栃原ロックフェス2017

正式名称「栃原岩陰遺跡フェスティバル」、通称「栃原ロックフェス」。北相木村教育委員会主催のあのイベントが、2017年にも開催された。ここではその熱いステージを紹介してみたい

栃原ロックフェスの歴史

そもそもは2010年、長野県の「地域発元気づくり支援金活用事業」の採択を受け実施された「栃原岩陰遺跡シンポジウム2010 ここまでわかった栃原岩陰遺跡」がきっかけであった。この時は、土器の年代測定などの最新の成果を発表し、明治大学元学長の戸沢充則名誉教授始めとした豪華ゲストを招き、栃原岩陰遺跡の魅力を語ってもらった。約150名の参加をみた、伝説のイベントとなった。

その後2014年には「2014栃原岩陰遺跡縄文体験フェスティバル」で発掘体験なども試み、翌2015年、ついに「栃原岩陰遺跡フェスティバル」という名称で、イベントが開催される。この時は2日に分けて、研究者によるトークセッションや遺跡見学のミニツアー、縄文釣り体験なども行われた。続く2016年にも「栃原岩陰遺跡フェスティバル2016」が開催され、海との交流をテーマにトークや体験が行われている。

栃原ロックフェス2017初日

それでは、最新2017年の様子を紹介しよう。この年のフェスは、イベント史上初、日を隔てた2日間で開催された。タイトルは「日本の洞窟遺跡と世界の洞窟遺跡」である。

初日の10月21日は、晴れてこそいたものの、大型の台風が近づいている中での開催。それでも会場には50名を超える考古ファンが集まった。

まずは「日本中部の洞窟遺跡最前線」というテーマで、現在発掘調査が進行中の洞窟岩陰遺跡についての最新情報を伺う。

國學院大學の谷口康浩氏からは群馬県長野原町居家以岩陰遺跡、津南町教育委員会の佐藤雅一氏からは新潟県魚沼市黒姫洞窟遺跡、首都大学東京の山田昌久氏からは長野県小海町天狗岩岩陰遺跡について、それぞれの発掘調査やその成果を発表して頂いた。どの遺跡も現在調査が進行中で、次々と明かされる新しい発見の様子に、会場のボルテージはアップしていった。

その後はスペシャルセッション、上記の先生方に加え、フェス最多登壇のゲスト藤山龍造氏（明治大学）を加えてますますヒートアップ。洞窟岩陰遺跡についての討論を行った。普通では残らない有機質の遺物が見つかる洞窟岩陰遺跡の特殊性や、洞窟岩陰の使われた時期を紹介。さらに他の遺跡との関わり、縄文時代の移動や定住の問題、さらには時代を超えて、平野部とは異なる山間部の歴史や文化にも話が及んだ。

セッション終了後は、縄文食の試食やタカラガイを使ったペンダント作りも行われた。

栃原ロックフェス2017・2日目

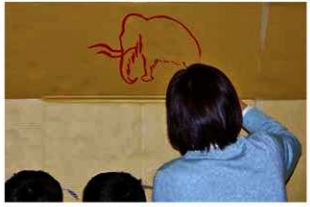
フェス2日目は、これもイベント史上初、11月3日文化の日において「北相木村総合文化祭」と同時開催とし、ゲストに東京藝術大学の五十嵐ジャンヌ氏をお迎えした講演会を行なった。テーマは「ヨーロッパの洞窟壁画」。

講師の五十嵐氏は、本場ヨーロッパにおいて旧石器時代の洞窟壁画を学んだ経験を持つ。この日も世界遺産ラスコー洞窟の壁画を中心に、氏が研究されているヨーロッパ各地の洞窟壁画と、そこから考える旧石器時代人の意識や、人類にとっての芸術の意味などを、分かりやすく解説してくれた。

そして後半では、用意した壁（実は段ボール？）に、五十嵐先生の指導でマンモスの絵を描くワークショップを行っている。

今から3万年以上も前、ヨーロッパの旧石器時代に沢山残されたマンモスの壁画。一見難しそうだが、先生の観察から得られた共通の要素を教わってチャレンジすると、案外簡単に壁画風マンモスが描けるから不思議だ。大人から子どもまで、皆さん楽しみながら描いていた。

栃原岩陰遺跡は縄文時代（約1万年前）、もちろんマンモスも居ないし壁画もないが、2日に及んだフェスを通して、人類が洞窟岩陰を利用する理由や、その時代を考える材料を手に入れる事が出来たのではないだろうか。



栃原ROCKフェスは終わらない

2017年のフェスは、こうして幕を閉じた。しかし、栃原ロックフェスは、まだ終わらない。今年もまた、違う切り口で、栃原岩陰遺跡の謎に迫っていくことだろう。

TOCHIBARA ROCK shelter site FESTIVAL

to be continued

学術論文

旅する縄文土器

―北相木村坂上遺跡出土の阿玉台式土器―

井出 浩正

はじめに

本稿で取り上げるのは、北相木村坂上遺跡から出土した阿玉台式土器である。阿玉台式土器は、千葉県香取市（旧香取郡小見川町）阿玉台貝塚を標識遺跡とする縄文時代中期の土器型式である。主に東関東に分布し、西関東、北関東、南東北、中部高地、北陸の一部の遺跡から出土する（出土頻度は概ね列挙した順である）。長野県内では古くから茅野市長峯遺跡例が知られており、近年同遺跡の発掘調査において、よく似たほぼ完形の阿玉台式土器が発見され注目されたことは記憶に新しい（寺内 2005）。

縄文時代中期の中部高地は「縄文のビーナス」の愛称で著名な国宝土偶をはじめ、極めて装飾性の高い勝坂式土器や、千曲川流域で発見が相次いでいる焼町土器など、立体的な造形を特徴とする土器が知られている（第１表）。そうした地域に、はるばる東関東由来の阿玉台式土器がどのようなルートで、なぜもたらされたのか。本稿では県内（佐久地方）と県外（群馬県西部）からアプローチを試み、現段階で坂上遺跡出土の阿玉台式土器がどのような背景でもたらされたか考えてみたい。

第１表
東信地域における縄文時代中期の様相（藤森 2012・2013 より作成）

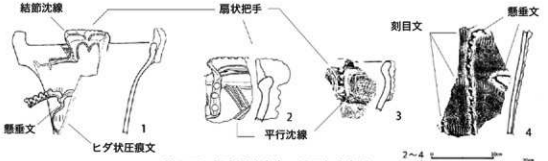
東信地域	他地域		井戸尻編年	新地平編年	cal BC
	五領ヶ台Ⅰ式		九兵衛尾根Ⅰ式	1a～1b	3250-3490
東信系	五領ヶ台Ⅱ式		九兵衛尾根Ⅱ式	2 3a～3b 4a～4b	3490-3470 3470-3250 3450-3430
後沖式	阿玉台Ⅰa式 阿玉台Ⅰb式	勝坂1式	狐沢式	5a 5b 5c	3430-3410 3410-3390 3390-3370
焼町古段階	阿玉台Ⅱ式	勝坂1式	新道式	6a 6b	3370-3350 3350-3330
↓	阿玉台Ⅲ式	勝坂2式	藤内Ⅰ式	7a 7b	3370-3350 3350-3330
焼町新段階		勝坂2式	藤内Ⅱ式	8a 8b	3270-3200 3200-3130
↓	阿玉台Ⅳ式	勝坂3式	井戸尻Ⅰ式	9a	3130-3050
↓		勝坂3式	井戸尻Ⅱ式	9b 9c	3050-2970 2970-2950
↓	加曽利E1式／曽利Ⅰ式		曽利Ⅰ	10a	2950-2920

ら比べると部分的な調査である。

図示した阿玉台式土器はいずれも遺構に伴わない包含層出土である。1、2、3 は深鉢形土器の口縁部、4 は胴部破片である。1、2、3 はいずれも阿玉台式土器の特徴の一つである扇状把手を有しており、隆線脇に結節沈線が施されるもの（1）、平行沈線が施されるもの（2・3）がある。また胴部にはヒダ状圧痕文（1）、それが簡略化されたと考えられる刻目文（4）が認められる。1 は阿玉台Ⅰb 式、2、3 は阿玉台Ⅱ式に比定される。4 は刻目が横方向に施され、隆線による懸垂文が縦位や一部蛇行状に施されている。刻目は貝殻の復縁を押し当てて文様が描かれた可能性がある。文様や文様要素から阿玉台Ⅰb 式～同Ⅱ式と考えられる[1]（第２表を参照）。なお、これらの深鉢以外に、浅鉢や粗製的な土器[2] は確認されていない。

１．坂上遺跡出土の阿玉台式土器

坂上遺跡は南佐久郡北相木村坂上にあり、標高約 1000 メートルの相木川右岸の河岸段丘上に位置する。かつて八幡一郎は著書『南佐久郡の考古學的調査』で坂上遺跡に言及しており、同村の縄文時代遺跡として古くから知られている。遺跡前の村道を東にぶどう峠を越えると、群馬県上野村と接する県境に程近い山間の遺跡である。今回扱う阿玉台式土器は個人住宅建設に伴う発掘調査で出土した（第１図）。坂上遺跡全体か



第１図　坂上遺跡出土の阿玉台式土器

２．隣接地域の阿玉台式土器：佐久地方

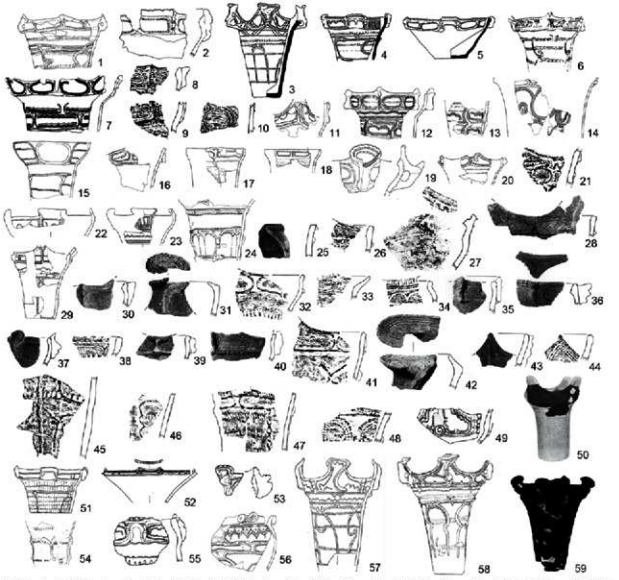
坂上遺跡出土の阿玉台式土器がどこに由来するのか。まず、坂上遺跡の周辺地域について、地形上のまとまりとして捉えやすい千曲川上流域の佐久地方から出土している阿玉台式土器を概観する[3]（第２図）。

佐久地方の阿玉台式土器は、阿玉台Ⅰa 式（17、18、20）から同Ⅲ式（15 ?、16）までが出土しており、阿玉台Ⅰb 式と同Ⅱ式土器が出土の多くを占めているといえる。器形が分かる復元個体をみても、山形波状（1、3、6、7、11、12、28、29、31、39 ～ 42、49、50）や扇状把手（2、4、22、23、36、51、55）平縁（19、37、53）の深鉢形土器が主体であり、文様構成、文様要素も東関東の阿玉台式土器に共通する点が多いといえる。油田遺跡（上田市）や上ノ段遺第４号住居址（長和町）からは阿玉台Ⅰb 式に比定される扇状把手を有する浅鉢が出土している（5、52）。後述するように、東関東でも出土例が少なく注目したい。

遺構出土では勝坂式土器や焼町土器、いわゆる斜行沈線文土器などに客体的に共伴しているのが特徴である。川原田遺跡（御代田町）J–20 号住居址や J–50 号住居址、上吹上遺跡（佐久市）第６号住居址、上ノ段遺跡第４号住居址関址において、阿玉台式土器が住居内の炉体土器として検出されている（12、15、51、52）。上吹上遺跡では阿玉台式土器のほかに狐沢期の深鉢が密着した状態で炉体土器として出土している（51）。阿玉台式土器が炉体土器として用いられる例は少なく、特に阿玉台式土器が主体となる東関東では住居跡は地床炉もしくは炉跡が検出されないことが多い。一方、勝坂式期の住居跡からは、地床炉、添石炉、石囲炉、埋

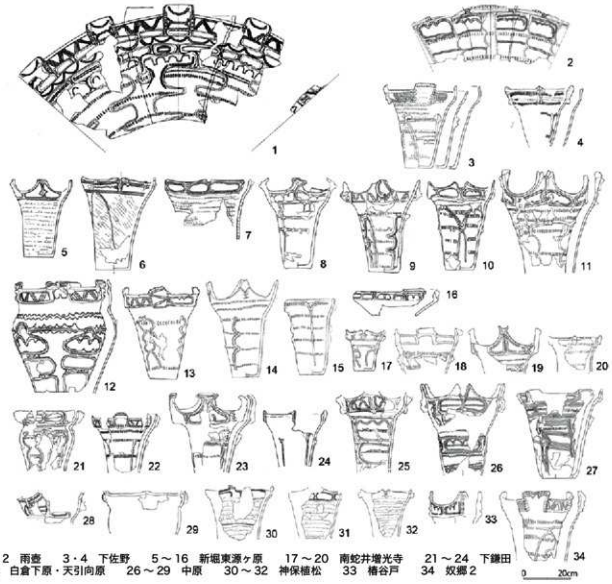
第２表　阿玉台式土器の主な属性（井出 2005）

土器型式／属性	彫刻文	鳥押文	沈線文	製作痕（輪積み痕）	ヒダ状圧痕文	刻目文	爪形文	縄文	無文	雲母	砂粒	石英粒
雷八類（阿玉台直前）	○	△	○	○				○	○	△	○	
Ⅰa式	○	○（単列）	○	○				×	○	○	◎	
Ⅰb式		○（単独化）	○	○	○	○			○	○	◎	
Ⅱ　式		○（複列化）	○			○	○	○（細い条）	○	◎		○
Ⅲ　式		○	○				○	○	○	◎		◎
Ⅳ　式			○					◎	△	○		◎



1　八千原　2　真光寺　3～5　油田　6・7　久保在家　8～10　滝沢　11～16　川原田　17～19　大星尻　20～48　寄山
49　砂原　50　後沖　51　上吹上　52　上ノ段　53・54　明神原　55・56　滝　57・58　長峯　59　中ッ原　0　20cm
※ 縮尺：復元個体は 1/16　復元個体（写真）は不明　破片（拓本・写真）は 1/8

第２図　佐久地方を中心とする阿玉台式土器



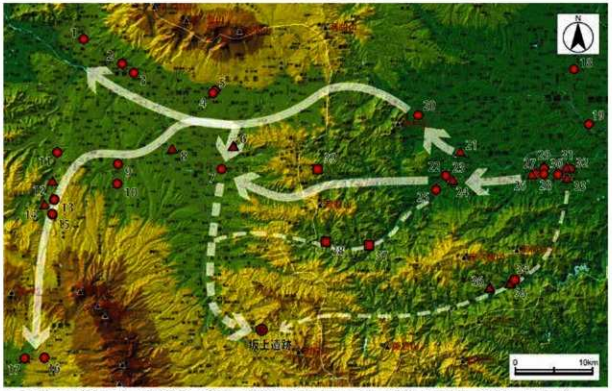
第３図 群馬県西部の阿玉台式土器

甕炉、石囲埋甕炉などさまざまな形態の炉跡が検出される。すなわち、そもそも住居跡の炉体土器に阿玉台式土器が使用されていたこと自体が稀少例であるばかりか、この地域にとって客体的な存在の阿玉台式土器が住居跡の炉に選択的に使用されているという現象が指摘できるのである。

３．隣接地域の阿玉台式土器：群馬県西部

次に、群馬県西部を対象に阿玉台式土器を抽出する。安中市、富岡町、上野村、南牧村、神流町、高崎市などの佐久地方に隣接する、あるいは近接する群馬県西部県境を主に対象とした[4]。地域によっては調査事例が少ないため、現段階での傾向として提えておきたい。当該地方では、新堀東源ヶ原遺跡（安中市）、南蛇井増光寺遺跡（富岡市）、下鎌田遺跡（下仁田町）が大きな集落跡といえる。南蛇井増光寺遺跡と下鎌田遺跡は指呼の距離にあり、新堀東源ヶ原遺跡もこの２遺跡と同じ丘陵沿いに位置する。いずれも上信越自動車道の建設に伴う発掘調査のため、集落全体に及ばない部分的な調査となっている遺跡もあるが、住居跡や土坑から多数の阿玉台式土器が出土しており、当該期の拠点的な集落と考えられる。佐久地方のすぐ東隣に阿玉台式期を主体とする遺跡群があることは注目すべきである。

この地域の阿玉台式土器は阿玉台Ⅰａ式から阿玉台Ⅱ式まで出土している（第３図）。他地域と同様に阿玉台Ⅱ式土器をピークとしながらも、阿玉台Ⅲ式土器以降は皆無に近いといえる。阿玉台Ⅰａ式が一定量存在し、土坑内で異系統土器と共伴する事例が多く認められる（５～７、30～32）。当地域における阿玉台式土器のあり方を考える上で重要であろう。阿玉台Ⅰｂ式から阿玉台Ⅱ式は、山形波状（８～11、17、19、23、25、26、28、33）や扇状把手（1、3、12、13、18、27、34）や平縁（21）を有する深鉢、浅鉢（16）、粗製的な深鉢（4、14、15、20、24、29）など、利根川下流域をはじめ、阿玉台式土器が主体となる地域に共通する土器組成を有している。阿玉台式土器を使用した集団が、ある程度の時間幅において伝統的に居住していたことが窺えよう。新堀東源ヶ原遺跡の遺構外出土で扇状把手を有する浅鉢が出土している（16）。阿玉台式土器の分布圏内においても扇状把手を有する浅鉢出土例が少ないが、そうした中で、本例や油田遺跡例、上ノ段遺跡例などが点在していることが特筆される。



第４図 群馬県西部から佐久地方を中心とする阿玉台式土器の流入ルート
（カシミール３Ｄにより作成）

遺構出土例では、雨壺遺跡（高崎市）62 号住居跡から阿玉台Ⅱ式土器の大形の胴部破片が炉体土器として検出されている。既述の川原田遺跡や上吹上遺跡、上ノ段遺跡など、佐久地方との関わりが窺えよう。住居跡出土では、新堀東源ヶ原遺跡、南蛇井増光寺遺跡や下鎌田遺跡から略完形や大形破片がまとまって出土している。小破片の住居跡や土坑出土を含めると、白倉下原・天引向原遺跡（甘楽町）や椿谷戸遺跡（高崎市）、中原遺跡（高崎市）、神保植松遺跡（高崎市）などがあり、さらに遺構外出土破片を含めると周辺に密集している。奴郷２遺跡（神流町）では１号住居跡から阿玉台Ⅰｂ式土器が出土し、炉内から斜行沈線文土器が検出されている。直線距離では坂上遺跡に最も近い群馬県境の遺跡のひとつといえる。

かつて茅野市長峯遺跡出土の阿玉台式Ⅰｂ式土器（第２図57、58）について、寺内隆夫は群馬県西部をその故地と推測した（寺内 前述）。その論拠の一つとして長峯遺跡出土の阿玉台式Ⅰｂ式土器の「R」や反転「R」字状、逆「し」状などの胴部懸垂文が挙げられる。寺内は、これらの懸垂文は同時期の佐久地方に分布するいわゆる後沖式土器の胴部懸垂文の模倣ないし影響を受けたものと考えており、こうした懸垂文を介在させることによって、長峯遺跡出土の阿玉台式土器の故地が群馬県西部に求められると考えたのである。今回取り上げた奴郷２遺跡では胴下半部を欠いているものの、「R」字状の懸垂文が施されており、また南蛇井増光寺遺跡においても小形の深鉢ではあるが「R」字状の懸垂文が施されている。長峯遺跡出土事例の故地を考える上でも、またそれを含む佐久地方の阿玉台式土器のあり方を考える上でもこの２例は興味深い事例といえる。

４．坂上遺跡出土の阿玉台式土器は どこからもたらされたか？

前節までをまとめると、以下を抽出できる。

①佐久地方に近接する群馬県西部県境において、新堀東源ヶ原遺跡や南蛇井増光寺遺跡、下鎌田遺跡を中心とする集落跡の住居跡や土坑からまとまった阿玉台式土器が出土していること、さらに深鉢、浅鉢、粗製的な土器が出土することから、これらの集落跡には阿玉台式土器を作り、使用する集団が存在したことが窺える。これらの集落跡の存在は、当該地域が単に長野県内に分布する阿玉台式土器の一時的な流入路としてではなく、むしろ長野県内に持ち込まれた阿玉台式土器の供給源的な存在であった可能性

が高いといえよう。

②寺内が指摘する「R」字状や逆「し」状の胴部懸垂文を有する阿玉台式土器が群馬県西部県境に広く認められることから、東信地方を中心とする後沖式土器との型式学的な交流が推測される。

③客体的な存在でありながらも阿玉台式土器が炉体土器として特徴的に使用されている事例が川原田遺跡、上吹上遺跡、上ノ段遺跡などで認められ雨壺遺跡例との関わりが窺えること、また扇状把手を有する浅鉢が新堀東源ヶ原遺跡と上ノ段遺跡から出土していることを考えると、佐久地域と群馬県西部県境とのヒト、モノの往来が推定される。

以上を踏まえ、やや強引だが群馬県西部県境から長野県内への阿玉台式土器の流入路を考えてみたい（第4図）。ひとつは、新堀東源ヶ原遺跡を拠点とした碓氷峠越えである。浅間山の稜線に沿って西進すると川原田遺跡や滝沢遺跡（御代田町）などがあり、さらに北西に進むと久保在家遺跡（東御市）や油田遺跡などの千曲川中流域の遺跡群へ接続する。また川原田遺跡から南西に進むと上吹上遺跡や後沖遺跡（佐久市）など蓼科山麓周辺の遺跡があり、さらに西に進むと上小地域を結ぶ依田川沿いに上ノ段遺跡がある。一方、上ノ段遺跡から南に蓼科山方向に進むと、大門川沿いに焼町土器の拠点的な集落である明神原遺跡（長和町）や滝遺跡（同左）などがあり、大門峠を越えると冒頭で紹介した長峯遺跡（茅野市）に到達する。長峯遺跡出土の阿玉台式土器の搬入ルートとして想定されうるだろう。

では、坂上遺跡出土の阿玉台式土器は一体どこからもたらされたのだろうか。筆者は南蛇井増光寺遺跡や下鎌田遺跡がある下仁田町や富岡市から鏑川に沿って西へ進んだルートが一つの有力な候補ではないか、と考えている。これは現在の国道254号線にほぼ重なる。[5] 下仁田町から佐久地方へ抜けると寄山遺跡群があり、寄山遺跡群を経由して千曲川流を上流に遡って坂上遺跡に到達した可能性がある。一方、関東山地を縫うように名もなき峠を越えて坂上遺跡に到達した可能性もある。奴郷2遺跡をはじめ、神流町には阿玉台式土器が出土する遺跡の存在が指摘されており、未見の遺跡が存在する可能性を十分考慮に入れる必要がある。南牧村や上野村では縄文時代中期の遺跡が点在するため、阿玉台式土器がもたらされた可能性もあろう。いずれにせよ、群馬県西部の県境を東から西に越えて、坂上遺跡に阿玉台式土器がもたらされた可能性が高いと考える。

おわりに

本稿では坂上遺跡出土の阿玉台式土器を端緒に、佐久地方で出土する阿玉台式土器の故地とそのルートを検討した。もう15年以上前、坂上遺跡出土の阿玉台式土器の資料見学のため北相木村考古博物館に伺った際、利根川下流域など東関東に分布の中心がある阿玉台式土器がなぜ山間のこの遺跡にあるのか、奇妙に思えたことを覚えている。しかし、先学を踏まえ、資料の集成と吟味によって、必ずしも直接東関東から持ち込まれたわけではなく、佐久地方と接する群馬県西部県境に供給源がある可能性を窺えるに至った。坂上遺跡出土の阿玉台式土器の存在は、もはや不可思議でも特異な事例でもなく、地理的にも当時の文化背景においても合点のゆく、縄文時代中期におけるヒト、モノの交流のあり方を示す貴重な証拠なのである。

(註)

(1) 阿玉台式土器は西村正衛による利根川下流域の貝塚群の層位的な発掘調査によって、阿玉台式土器の編年が示されている

(2) 筆者は文様要素のみ、または口縁部から懸垂文が施されるのみ深鉢を疎文系土器と呼び、粗製的な性格を推定している（井出2008を参照）

(3) 佐久地方を含めた長野県内を中心とする阿玉台式土器については、『聖石遺跡・長峯遺跡（別田沢遺跡）』中で寺内隆夫が概要をまとめている（寺内2005）

(4) 群馬県内の阿玉台式土器は、赤城山南麓を中心とする利根川上流域に大きな遺跡群があり、本稿で扱う群馬県西部の阿玉台式土器も大きな意味でそのグループに入ると思われる

(5) 阿玉台式土器の出土ではないものの、下仁田町の国指定史跡荒船・東谷風穴蚕種貯蔵所跡の整備に伴う調査において、史跡内の岩陰遺跡から勝坂式土器と焼町土器が発見された。原位置かどうかは不明であるが、阿玉台式土器とほぼ並行する時期の活動痕跡として興味深い事例である

発掘調査報告書

北相木村教育委員会 2000『坂上遺跡』
群馬県教育委員会・(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団 1994『白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ』
群馬県教育委員会・(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団 1997『神保植松遺跡』
群馬県教育委員会・(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団 1997『南蛇井増光寺遺跡Ⅵ』
群馬県多野郡吉井町教育委員会 1989『椿谷戸遺跡発掘査報告書』
群馬県多野郡吉井町教育委員会 2004『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』
(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984『熊野堂遺跡第Ⅲ地区 雨壺遺跡』
(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989『下佐野遺跡』
山武考古学研究所 1998『奴郷2遺跡』
下仁田町教育委員会 2012『荒船風穴蚕種貯蔵所跡調査報告書1』
小泉郡東部町教育委員会 1982『真行寺』
東信土地改良事務所・望月町教育委員会 1983『後沖遺跡』
長門町教育委員会 2001『明神原・桑木原遺跡』
長門町教育委員会 2001『滝遺跡』
長野県土地開発公社・佐久市教育委員会 1995『寄山・寄山古墳・中条峯・勝負沢』
長野県御代田町教育委員会 1997『滝沢遺跡』
長野県御代田町教育委員会 1997『川原田遺跡』
日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局・長野県教育委員会・(財) 長野県埋蔵文化財調査センター 1998『第13章砂原遺跡』『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1』
日本道路公団・群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会 1997『新堀東源ヶ原遺跡』
日本道路公団・群馬県教育委員会・下仁田町遺跡調査会 1997『下鎌田遺跡』
日本道路公団東京第二建設局・長野県教育委員会・(財) 長野県埋蔵文化財センター 1991『第11節大星尻古墳群』『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書2』望月町教育委員会 1990『上吹上遺跡』

【論文等】

井出浩正 2005「佐久地方の阿玉台式土器について」『佐久考古通信』(No.91) 佐久考古学会
井出浩正 2008「常総における阿玉台式土器Ⅱ式土器の様相」『生産の考古学Ⅱ』同成社
井出浩正 2012「長野県内における阿玉台式土器の様相ー群馬県西部の阿玉台式土器との比較からー」『長野県考古学会誌』(143・144合併号) 長野県考古学会
上田市立博物館 1979『郷土の歴史 原始・古代文化』
佐久市志編纂委員会 1996『佐久市志 歴史編（一）原始古代』
新編長門町誌編纂委員会 1989「第二編 町の歴史」『新編長門町誌』
寺内隆夫 1996「斜行沈線文を多用する土器群の研究ー『後沖式土器』設定は可能か？ー」『長野県の考古学』((財) 長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ) (財) 長野県埋蔵文化財センター
寺内隆夫 2005「第6章まとめ（6）遠隔地域の土器ー長峯遺跡出土の阿玉台式土器についてー」『聖石遺跡・長峯遺跡（別田沢遺跡）』長野県諏訪地方事務所・長野県諏訪建設事務所・長野県茅野市・長野県埋蔵文化財センター
長野県南佐久郡誌編纂委員会 1998『南佐久郡誌 考古編』
南牧村誌編さん委員会 1981『南牧村誌』
西村正衛 1984『石器時代における利根川下流域の研究ー貝塚を中心としてー』早稲田大学出版部
藤森英二 2012「長野・山梨両県の中期土器編年についてー現状と課題ー」『長野県考古学会誌』(143・144合併号) 長野県考古学会
藤森英二 2013「東信地域における縄文時代中期土器の動態」『日本考古学協会 2013年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路信州』日本考古学協会 2013年度長野大会実行委員会
万場町誌編さん委員会 1995『万場町誌』
八幡一郎 1928『南佐久郡の考古學的調査』岡書院

※紙数の都合、主要なものに限らせていただいた。ご容赦願いたい

北相木村考古学ニュース

栃原岩陰遺跡の土器からマメ類の圧痕

平成29年2月、明治大学黒耀石研究センターと土器種実圧痕研究グループの調査により、栃原岩陰遺跡出土の縄文早期土器から、マメ類の種子圧痕が発見されました。

放射性炭素年代測定でおよそ10,800年前とされ、ダイズ属と思われる種子圧痕が発見された撚糸文土器。左上の小さな穴が種子圧痕。

栃原岩陰遺跡出土の縄文時代早期の土器片から、マメ科に属する種子の圧痕が発見されました。圧痕というのは、土器の表面にみられる小さな孔などを指し、これにシリコンゴムを流し込んで顕微鏡などで観察することを「圧痕レプリカ法」と呼びます。近年はこの方法により、縄文時代にマメ類（アズキやダイズの仲間）、シソ（エゴマ）など、食料にすることの出来る植物の種子が、彼らの身近にあったことが分かってきました。

北相木村教育委員会では、現在栃原岩陰遺跡の遺物整理作業を行っていますが、この度「明治大学黒耀石研究センター」と「土器種実圧痕研究グループ」の調査により、全部で6点のマメ類の種子圧痕が見つかり、そのうち2点はアズキ亜属とダイズ属であると分かりました。

土器はいずれも縄文時代早期のはじめ頃（およそ11,000～10,000年前）のものと思われ、現在全国各地で見つかっているマメの圧痕としてもかなり古いものと予想されます。今後の縄文時代研究でも注目されていくことでしょう。

今日はこの人

譽田亜紀子さん

土偶女子って何？

2014年『はじめての土偶』(世界文化社)で突如土偶界(？)に現れ、それ以降「土偶のリアル」(山川出版社)や『知らざる縄文ライフ』(誠文堂新光社)を次々と出版し、縄文世界の案内人となる。

フリーライターの彼女は、なぜ土偶に魅せられたのか。土偶が1つも見つかっていない北相木村で、その謎に迫る。

学芸員F：そもそも、なぜ土偶だったんですか？

譽田：元々はライターとして色々な文章を書いていましたが、取材中、偶然奈良県の観音寺本馬遺跡の土偶を見た時に、これを知らないのってとっても勿体ないなって思ったんです。海外の著名な芸術品でなくても、足元にこんな素敵なものがあるんだって。それを伝えたくて、あちこちに土偶の本の企画を持ち込んだり、大学の先生に教えを乞たりしてました。

F：それが最初の土偶本『はじめての土偶』につながるんですね。その後全国各地の遺跡や遺物を沢山ご覧になっていると思うのですが、今日ご覧いただいた栃原岩陰遺跡の遺物はいかがですか？

譽田：まず骨の針の細さにびっくりしました！これ1万年近く前のものなんですよね？どうやって作ったんですか？

F：まさかの逆質問。これ、シカやイノシシ、あるいは鳥の骨を石で磨いて作るんですよ。この砥石と言われる石器でごしごしと…しばらく骨角器づくりのレクチャー)

譽田：なるほど。じゃあこっちの釣針は？

F：これはこうして…（しばらく骨角器づくりのレクチャー）。あ、この貝殻の製品はどうですか？海の貝なんですよ！

譽田：ていうか、こんな山の中に、どうやって海の貝を持ち込んだんですか？どこの海から？そもそもこっちの骨角器って、装身具？実用品？（以下、質問責め…）

F：えー気を取り直して、栃原岩陰遺跡、土偶無いですが、どうですか？ダメですか？

譽田：土偶を軸に見ていくと、どうしても縄文時代の前期以降が多いですよね？でも栃原岩陰遺跡のように、土偶を必要としていない縄文世界にも逆に興味が湧きました。

F：では最後に、土偶女子は、モテますか？

譽田：モテません（笑）。そもそも土偶女子って、本の編集者の方が付けてくれたんです。よくある○○女子って感じで。だから私一人のことではなくていいんですよね。むしろ増えて欲しい。女子って歳でもないし（笑）。でも土偶や縄文の入り口として使ってくれるのであれば嬉しいですね。

遺跡や遺物を熱心に、そして楽しそうに見る譽田さん。彼女は単に「珍しいものが好き」ではなく、遺跡についての専門的な本を読み解き、そこにご自分の感性を乗せた文章を書かれています。これからも、縄文世界のメッセンジャーとして、ご活躍ください。

考古ウォーズ 北相木人類の逆襲！

堤　隆 Tsutsumi Takashi

やれ"縄文のビーナス"だ、"仮面の女神"だと、八ケ岳のあちら側が騒々しい。いいかげんにしなさい！…といいたいところだが、あんな素敵な土偶は佐久地方にはまったく出ていない。まあ、国宝なんだし、くやしいけれど惨敗である。いちもくさんに尻をまくって逃げるしかないのか（汗）。

しかし、逃げるは恥だが役に立つ（少し古いか）。逃げながら考えた。茅野や富士見など八ケ岳のあちら側にひと泡吹かせてやる材料が佐久地方にはほんとうにないのか！

そこで北相木の逆襲である。北相木栃原には9500年前の人骨があるではないか！1号と呼ばれる男性の頭骨はその大部分が残っていた。日本列島広しといえども、栃原で出た人骨の保存状態のよさにかなう先史時代人類の標本はない！もちろんこのような古い骨は八ケ岳のあちら側には存在していない。

さらに愉快にさせたのは、この骨を復元すると口元のキリリと締まった超イケメンが登場する、という分析結果であった。博物館に並ぶ頭蓋骨からどのようなイケメンが描けるのか。みなさんの想像力に期待するところである。あるいはジャニーズ系の顔を想像する人もいるのかもしれない。

骨を分析したら、食べた物までわかった。草食系ではなく、けっこう肉食系らしい。シカの骨がいっぱい出ているから、シカ肉のステーキなんかを食べていたんだろうか。たまにしか肉が出ない我が家の食卓とは違い、うらやましい限りである。

北相木は松茸の産地だから、松茸を食べていたかどうかは知らないが、縄文人がキノコを食べていたのは確実らしい。キノコ形土製品という焼き物が遺跡から見つかるため、キノコとの深い関係性がわかるのである。

きわめつけは、海の貝でできたペンダントが出土し、その胸元を飾っていたらしいことである。ハダカ同然でみすぼらしい原始人のイメージは払拭しなければならないだろう。

21世紀でもっとも進歩した科学分野のひとつにDNA研究があるが、最新のは、何千年も前の人骨からDNAを抽出することは、「石から血を絞り出すようなもの」、つまりは絶対不可能な事と考えられたのだが、最新の科学はそのことを見事やってのけたのだった。それによると今の日本に生きる私たちの中には確実に縄文人のDNAが残っているらしい。

そう考えると栃原縄文人のガイコツが、何代か前に死んだおじいちゃんのように思えてくる（かな？）。

堤　隆（Tsutsumi Takashi）

1962年佐久生まれ。國學院大學大学院修了。博士（歴史学）。中学高校の頃には考古学に目覚め、特に南牧村矢出川遺跡の細石刃に強く惹かれ、今日でも主要な研究テーマとしている。専門は旧石器時代。1992年藤森栄一賞受賞。2007年岩宿文化賞受賞。2014年第1回日本旧石器学会賞受賞。現在は長野県御代田町浅間縄文ミュージアム館長兼主任学芸員。明治大学黒耀石研究センター研究員。東京大学大学院人文社会系研究科講師も務める。

主な著書

『氷河を生き抜いた狩人 矢出川遺跡』（シリーズ「遺跡を学ぶ」009）新泉社

『浅間 火山と共に生きる』ほおずき書籍　他、多数

栃原岩陰遺跡の遺物整理作業

今年も明治大学、早稲田大学、東海大学の学生を中心とした、栃原岩陰遺跡出土遺物の整理作業が行われました。

北相木村教育委員会では、1965 ～ 1973 年の栃原岩陰遺跡発掘の調査報告書を出すために、長年、遺物の整理作業を続けて来ました。

平成 29 年度も、12 月と 2 月に集中的な作業を行っています。今回の作業の内容は、出土した土器の分類や図化作業でしたが、これにより栃原岩陰遺跡の土器群全体を把握することが出来ました。また同時に、専門家による鳥や爬虫類などの出土した骨についの分類も進めています。

そして、これまでの作業も含め、土器、石器、骨角器、さらに動物骨など、その全容が明らかにされつつあります。

学芸員のフィールドノート

北相木村 考古博物館報第 1 号「TOCHIBARA ROCK SHELTER SITE MAGAZINE」Vol.01、いかがでしたでしょうか。私が当館の学芸員を勤めて20数年。この間に、博物館や考古学、縄文時代研究を取りまく環境も変わってきました。そんな今の時代に寄り添いつつ、真の通ったマガジンを目指していきたいと思います。

増刊号となる今号では、特集としての栃原岩陰遺跡や栃原ロックフェスの記事の他に、3人の著名人からお力を頂きました。

論文「旅する縄文土器 」を寄せてくれた井出浩正君は佐久市出身で、彼が学生の頃、当館の土器（本誌にある坂上遺跡出土の阿玉台式土器）を見学に来たのがきっかけで、その後、栃原岩陰遺跡の遺物整理作業に毎年優秀な人材を集めてくれるようになりました。後輩にして恩人です。現在は東京国立博物館研究員。今回は北相木村の土器を含むその動きを、鮮やかに描き出してくれました。

土偶女子こと譽田亜紀子さんは、今や言わずと知れた考古学の伝道師。土偶女子の二つ名でも知られています。この方のすごいのは、普通は中々目を通さない、発掘調査報告書を読み込んでいるところ。だから彼女の記事は、考古学的な事実の上にあり、信頼が置けるのです。今回冬の北相木村にお招きして、その遺物を味わってもらいました。土偶はないですが、楽しんで頂けたようです。

リレーエッセイをお願いした堤隆氏は、やはり佐久市の人で、現在は御代田町浅間縄文ミュージアムの館長を務めます。私の学生時代から既に著名な若手研究者でしたが、現在は日本の考古学をリードする存在です。私も20年以上、弟のように面倒をみてもらっています。

考古学は 1 人では出来ません。これからもたくさんの仲間と、そして地域の皆さんと、遠い先祖の声を拾う旅を続けていければと思います。

北相木村考古学博物館学芸員　藤森 英二

北相木村考古博物館

〒384-1201
長野県南佐久郡北相木村2744
☎ 0267-77-2111
http://vill.kitaaiki.nagano.jp/museum/

平成29年度 北相木村考古博物館報
栃原岩陰遺跡マガジン vol.01
平成30年3月刊行

企画編集　藤森 英二（北相木村考古博物館学芸員）
発　行　北相木村教育委員会
印　刷　中澤印刷株式会社